

中国語会話インタラクションにおける話題終了部・開始部の領きのパターン についての探索的研究

趙 鵬群(神戸大学大学院生), 石井 カルロス寿憲(株式会社国際電気通信基礎技術研究所), 巽 智子(神戸大学)

1. はじめに

コミュニケーションにおいて、人々はことばだけではなく、身振りや視線などの非言語手段を用いて意思伝達をする。その中でも領きは多くのコンテキストにおいて見られ、インタラクションを調節する機能がある(McClave, 2000; メイナード, 1993)。日常会話を注意深く観察すると、領きは話題の転換部で頻発することがわかる。会話研究においても領きは話題転換ストラテジーの1つとして論じられるもの(蔡, 2011; 大谷, 2018)、話題転換時の領きのパターンの実証的研究はまだ見られない。話題管理の相互行為を深く理解するためには、話題転換部の非言語的手がかりのパターンを明確にすることが欠かせない。本研究は、3人の中国語母語話者による自由会話の動画を用いて、参加者の領き行動を分析することで、話題転換時の領きのパターンを分析する。

2. 先行研究

領きの役割について、メイナード(1993)は、話者交替システムのコンテキストから、相槌、発話権の受理、発話の切れ目の表示、フィラー、肯定、強調、などをあげている。近藤(2005)は領きを聞き手と話し手による行動として分析し、聞き手による領きの役割を、肯定を示す、発話を促す、肯定しながらターンを取る領きの3つのカテゴリー、話し手による領きの役割を、ターンを譲る、アクセントとしての領き、パンクチュエイトとしての領きの3つのカテゴリー、合計6つのカテゴリーに分類している。

領きと話題転換の関わりに関する研究は、中国語を対象とするものは見当たらないものの、日本語を対象とするものは半沢(2016)と大谷(2018)が挙げられる。半沢(2016)では、日本語会話におけるあいづち・領きの連鎖現象が話題転換時に約半数で起こり、高頻度な話題転換ストラテジーであると指摘している。大谷(2018)は2つの事例を用いて、日本語会話における話題の終結には視線の配布や領きによって遂行されることがあると指摘した。これらの研究は、話題転換を一括りにするか、話題終了部にのみ焦点を当てる傾向がある。しかし、話題転換には終了部と開始部に分かれ(村上・熊取谷, 1995; 楊, 2005)、領きがこれらの部分に異なる形で関与し、異なる機能を果たしていると考えられる。この点に関して、先行研究ではまだ検討されていない。

そこで、本研究では、中国語会話における話題転換部の領きの使用に焦点を当て、話題開始部と話題終了部における領きのパターンと機能に存在する相違点を探る。具体的には以下の2つの仮説を立てる。

- (1) 話題開始部と話題終了部で、領きは異なるパターンを示す。話題終了部では、領きの頻度が高く、また、連続して複数回おこなわれる領き行動が多く観察される。
- (2) 話題開始部と話題終了部で、領きは異なる機能を持つ。話題終了部では、間をうめるための領きの頻度が高く、話題開始部では発話を促すための領きの頻度が高い。

3. 分析方法

領きの観察には、株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)で収集された4組の3人の中国語母語話者による中国語の自由会話の様子を録音・録画したデータを用いた(図1参照)。3人の会話参加者のそれぞれの正面に設置したビデオカメラより、各参加者の頭の動作をはっきり確認することができる。データは1組につき10分間の会話、計40分間の会話を非言語行動(領き)も含めてターンごとに書き起こし・コーディングした。

ターンの定義に関して、中井(2003)、メイナード(1993)などを参照し、ターンを「会話中に一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位」と定義する。また、「ターンは本筋の話に関する実質的な発話から構成されており、一人の参加者のターンの間に、別の参加者のあいづち的な発話や領きはターンに含めない」(中井, 2003: 29)。ただし、

「話し手が発話順番を終えてすぐに聞き手が送る反応は、話し手の行動の勢力範囲内にあると考えられることから」(メイナード, 1993 : 58), あいづちとする。

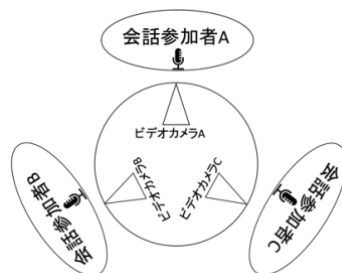


図1 会話録音・録画環境の様子

頷きは「はっきりと正常位置から下を向きすぐに戻す」(メイナード, 1993 : 61)頭の下振りの動きとする。また、連続して複数回おこなわれる一連の頷きの動作を一つの頷きイベントとして分析を行なった。

さらに、頷きがあいづちとしての機能と話題転換の文脈を考慮しつつ、メイナード(1993)、宮寄(2003)、近藤(2005)などを参照し、下に記す8つの機能カテゴリーに分類し、コーディングした。1つの頷きに、複数の機能が備えられている可能性があるため、今回は、宮寄(2003)に従い、最も重要だと判断される機能によって分類を試みることにした。

表1 頷きの分類カテゴリー

1 肯定を表す：肯定的な返答または同意を表す場合。同意表現「対(はい)」「(是的) そうです」などと同時に使われることが多い。
2 発話を促す：話し手が話しているうちに、聞き手が興味関心を示すための頷き。聞き手が話し手の目を見つめて早い頻度での頷きが典型的である。「嗯嗯(うんうん)」と同時に使われることが多い。
3 理解を示す：話し手が伝えた・伝えようとした情報がよくわかったことを伝えるための頷き。「啊ー(あー)」「哦ー(おー)」「这样啊(なるほど)」などと同時に使われ、文末で現れることが多い。
4 あいづちに対するあいづち：聞き手が理解している頷きをした後に、話し手が頷きを返す場合。
5 間をうめる：発話権を取ろうとする人がいないときに、間をうめ、会話の流れを保持するための頷き。視線を会話の他の参加者から外し、前方や下方を見ることで何かを考えている様子に見えることが多い。
6 アクセント：話し手が発話中に特定の語句の強調を表す場合。
7 発話の終わり：話し手が発話の終わり目に短い頷きを入れることで、話の終了を表示する場合。
8 その他：上記の分類のいずれにも当てはまらない、または意図の推測が難しい頷きの場合。

最後に、話題転換は楊(2007 : 39)の「先行話題の焦点とは異なる内容を会話の話題として確立させる一連の言語行動」と定義する。中国語母語話者2人によって協議し、会話データの話題転換部を29箇所認定した。話題導入発話文の前の5ターンを「話題終了部」とし、話題導入発話文(それまでの会話内容の焦点から外れた発話(楊, 2005 : 162))とその後の4ターンを「話題開始部」とし、合計290ターンを分析対象とした。

4. 研究結果

4.1 頷きのパターンについて

本研究のデータでは、465回の頷きが確認された。話題終了部には96回、話題開始部には39回、合計135回の頷きが確認された。中国語会話の話題終了部での頷きの数は話題開始部の約2.5倍で、顕著に多いことがわかる。また、表2では、頷きイベントにおける頷きの繰り返し回数の内訳を詳しく分析する。

表2 話題終了部と話題開始部での頷きイベントにおける頷きの繰り返し回数

繰り返し回数	話題終了部	話題開始部
1	30	13
2	25	11
3	19	6

4	13	5
5	4	2
6	1	
7	1	
8	1	1
10	1	1
13	1	
合計	96	39

中国語会話の話題終了部と話題開始部での領きの繰り返し回数は、単発の領きが最も多く、次いで2回、3回、4回、5回以上の繰り返しの順で、領きの連続回数が増えるにつれて、その発生回数は減少しているが、8回、10回、13回といった比較的多い繰り返し回数の領きも確認されている。話題開始部では、話題終了部に比べて5回以上繰り返している領きの回数は少ない傾向にあるが、両方がともに10%の割合であり、差異が見られなかった。

4.2 領きの種類について

表3 話題終了部と話題開始部での領きの種類

終了部の領きの種類	数	開始部の領きの種類	数
理解を示す	47(49%)	理解を示す	14(36%)
肯定を表す	31(32%)	肯定を表す	14(36%)
間を埋める	8(8%)	発話を促す	7(18%)
あいづちに対するあいづち	6(6%)	アクセント	2(5%)
発話を促す	2(2%)	発話の終わり	1(3%)
発話の終わり	1(1%)	その他	1(3%)
アクセント	1(1%)		
合計	96	合計	39

中国語会話の話題終了部と話題開始部において、ともに「理解を示す」と「肯定を表す」の領きが多く見られた。相違点に関して、話題終了部での領きの種類は話題開始部より多様である。具体的には、話題終了部では、「間を埋めるための領き」と「あいづちに対するあいづちの領き」はそれぞれ8回と6回見られたが、話題開始部では見られなかった。これらの領きは、「積極的な話題転換を進める手段」(半沢, 2016)であり、自らは発話権を取らないが、話の流れを保ちつつ、積極的に会話に参加している姿勢を示している可能性が考えられる。一方、話題開始部では、「発話を促す領き」が18%と比較的多く見られたが、話題終了部ではこの種類の領きは2%にとどまっている。これは、中国語会話の話題開始部で聞き手が新しい話題への関心や承認を積極的に示すことが多いことを示唆している。

5. 終わりに

本研究では、これまでの先行研究で注目されていなかった中国語会話における話題転換時の領きのパターンを話題終了部と話題開始部に分けて明らかにしようと試みた。分析の結果、中国語会話の話題終了部における領きの発生回数は、開始部の約2.5倍に及び、両者の間に顕著な差が存在することが明らかになった。これは、中国語の会話における話題の終了部での領きが、日本語の会話と同じように、話題の終わりを確認または促進する役割を果たしている重要な話題終了ストラテジーであることを示唆している。しかしながら、5回以上の連続的な領きは、終了部と開始部で類似しており、その発生割合に大きな差は見られなかった。これにより、仮説1は完全には支持されなかったが、部分的には支持されたと解釈できる。対照的に、仮説2は今回の結果により支持された。中国語会話の話題転換部における領きの役割が、話題転換の段階によって異なるという点が明らかにされている。具体的には、中国語会話の話題終了部では「間を埋める領き」と「あいづちに対するあいづちの領き」、開始部では「発話を促す領き」がそれぞれ特徴的である。中国語母語話者は話題の転換を円滑にするために、様々な局面で領きを行うことが示唆された。

本研究は、中国語会話インタラクションにおける領きの使用を新たな視点から探求し、中国語会話における話題管理の相互行為や非言語コミュニケーションの特徴をより深く理解することに有益だと考える。さらに、領きのパターンを理解することは、対話ロボットや人工知能(AI)の開発などに役立ち、ユーザーの意図や感情をより適切に読み取り、より人間らしい対話を実現することが可能になると期待される。しかし、本研究は40分間の限られたデータに基づいており、一般的な傾向を見るためには更なるデータの分析が必要である。また、今回はすべての話題転換を分析対象としたが、話題転換には「境界づけられたもの」と「境界づけられないもの」(花村, 2014)があるとされている、話題転換の種類ごとに領きの発生状況をさらに詳しく分析する必要があると考えられる。さらに、日本語教育の視点から見れば、日本語会話と中国語会話における話題転換部の領きの使用傾向の比較分析も必要である。

参考文献

- 蔡諒福(2011). 初対面会話における話題転換構造に関する一考察：日中社会人のデータをもとに 異文化コミュニケーション研究, 23, 1-19.
- 半沢千絵美(2016). 日本語会話における話題転換時の相づち・領きの連鎖について:初対面同士の2人による自由会話の分析から ときわの杜論叢 = The journal of Tokiwanomori, 3, 80-94.
- 花村博司(2014). 日本語の雑談会話における話題転換研究の方法 ―話題転換はどこで行われ、どう分類されるか― 言語文化学研究 (言語情報編), 9, 71-99.
- 近藤富英(2005). 非言語行動である「うなずき」の機能とその役割への一考察 人文科学論集 文化コミュニケーション学 科 編, 39, 55-63.
- McClave, Evelyn, Helen Kim, Rita Tamer, & Milo Mileff. (2007). Head movements in the context of speech in Arabic, Bulgarian, Korean, and African-American Vernacular English. *Gesture* 7(3), 343-390.
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995). 談話トピックの結束性と展開構造 表現研究, 101-11.
- 宮寄由美(2003). あいづちとうなずきの形式と運用 山形県三川町における調査 日本語研究, 23, 47-61.
- メイナード・K・泉子(1993). 日英語対照研究シリーズ(2)会話分析 くろしお出版
- 大谷麻美(2018). 話題の終結と開始のための相互行為 - マルチモダリティの観点からの分析 社会言語科学会第42回大会 発表論文集, 社会言語科学会, 137-140.
- 楊虹(2005). 中日接触場面の話題転換―中国語母語話者に注目して― 言語文化と日本語教育, 30, 31-40.
- 楊虹(2007). 中日母語場面の話題転換の比較-話題終了のプロセスに着目して 世界の日本語教育 日本語教育論集 = Japanese language education around the globe ; Japanese language education around the globe, 17, 37-52.